

杉本 信行氏 元日本国際問題研究所主任研究員



「二〇〇四年春、上海の日本総領事館で、一人の館員が、このままでは国を売らない限り出国できなくなるとの遺書を残して死んだ。私は、そのときの総領事であった。／上司として、

館長として、彼を守れなかったことへの無念はいまも変わることがない。本書冒頭の一文である。

吐く思いでつづられた現代中国論が本書である。中国を深く愛し、それゆえである、心底からの苦言を中国の政権中枢部に対して飾らぬ文体で語っている。

対中外交の現場で長らく中国を観察しつづけた日本の外交官が本書の著者である。上海で同僚を失った年の一時帰国で末期がんを発見され、病床にあって血を

なく、長大な覇権戦略をもって世界にみずからの地歩を着々と固めているか

なく、長大な覇権戦略をも

愛したからこそその苦言

すぎもと・のぶゆき
1949年1月12日、京都市生まれ。京都大学法学部在学中の72年、外務省公務員採用上級試験合格。73年入省。74～76年、語学研修で文革末期の北京語言学院と瀋陽遼寧大学に学ぶ。胡耀邦総書記の訪日をきっかけに日中関係が発展する83年から在中国日本国大使館1等書記官。

93年から財団法人交流協会台北事務所総務部長として台湾に赴任。民主化が進む台湾で、当時野党だった民主進歩党などのパイプも積極的に開拓した。01年、在上海日本国総領事に就任。貧困地区に足を運び、意義あるプロジェクトの実績積み重ねを目指す。04年、肺に異状が見つかり帰国。日本国際問題研究所主任研究員として情報分析に従事した。

える。しかしこれは外からみた中国の表層であって、内に回ってこの国を見据えれば、深刻を極める農民貧困、解消の見込みのつかない水不足問題、発足して間もないにもかかわらず早くも崩壊の危機に瀕する年金制度、これらを起因とする無数の住民反乱など、耐え

難く重い荷物を背負い、あえぎながら歩く巨人の姿が浮かんでくる。本書は中国の諸困難を鋭利な観察眼をもって憚ることなく記す。政権中枢部の中に渦巻く不安、悲観、絶望、恐怖をこれほどの説得力をもって描いた著作を私は他に知らない。実際、「中国の革命

第二世代、第三世代の党指導者たちの子弟たちの多くは海外留学に出ているが、将来、中華人民共和国のために働くというより、共産党の支配体制が崩れた場合に備えているといったほうが正しいのではないだろうか」という切ない思いを著者は吐露している。



PHP研究所

大地の咆哮 | 元上海総領事が見た中国

対日強硬策についても、抱え切れない国内的矛盾の中で政権の正統性を維持するために、実はそうせざるをえないのだと主張される。本書の出版後、ほどなくして著者は逝去された。若き愛国者の夭折に痛惜の思いが深い。
【評者 選考委員・渡辺利夫】